
ラブカクテルス その63

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その63

【Nコード】

N2363E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は恐い夢を見ないようにこのカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は夢の入り口でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は泣きながら起きた。

それはそれは怖い夢を見たからだった。

世にも恐ろしいお化けが私を襲ってくるのである。

いくら逃げても、どこまでも追いかけてくる。

そして追い詰められて、やっとそこで目が覚めた。

ママやパパはグッスリ寝てしまっていて、私が泣いていることには気づかない。

私はベッドから降りて、暗がりの中をやっとの思いでその寝息を頼りに進んで行く。

なんとかたどり着いたママ達のベッドにつかまり、手前で寝ていたパパを揺すって起こしてみた。

パパは寝ぼけながら私の頭を撫でて、どうしたの？と聞く。

私が怖い夢を見たのと言うと、そうか、とパパは言いながら上半身

を起こして、私に言った。

それなら、これから夢の中に行つて、その悪い奴を倒しに行つてあげるから、もう一度眠つて、夢の中に着いたらパパを呼びなさい。そう言つたパパは、私の背中をポンポンと叩き、私のベッドまで一緒に来てくれた。

布団に入つた私の横に、お気に入りの黄色いウサギのぬいぐるみを優しく置いて、

よし、パパもこれから夢の中に入る支度をするから、また後で会おうね。

そう言うパパは、自分のベッドにまた戻つたようで、布団を被る音がバサバサとした。

私も小さく、うん。わかつたと、黄色いウサを抱きしめながら目を閉じて、それから幾らも経たないうちに、すんなりと寝てしまったのだつた。

夢の中に私は立っていた。

私はまだ抱いている黄色いウサをきつく抱えて、大きな声でパパを呼んだ。

すると、どこからともなくして、パパはかなり派手な色の、体にぴたりした服に、背中には大きいマントをヒラヒラさせながらやってきたのである。

私が口をポカーンと開けてそれを見ていると、派手なカツコのパパは、

君かい？パパちゃんマンを呼んだのは。

と聞いてきた。

私はキョトンとしたまま、冷めた目をして頷いた。

そんな私に、パパは、

駄目だよ、そんなノリじゃっ！もっと気分を上げないとパパちゃんマンは強くなれないよ！

とジダンダを踏む。

私が首を傾げて、どうしたのパパ？そのカッコは？と聞いてみると、私の腕の中でいきなりモゾモゾと暴れ出す物が。

黄色いウサだった。

離してよ。く、苦しいよ。

私は慌てて、腕から力を抜いた。

黄色いウサは、私から勢いよく飛び出すと、パパの横に並び、二人？一人と一匹？はポーズを決めて、やあ！とにこにこ顔を浮かべる。私は体が固まり、ヒいた。

一人と一匹は、オイオイ、そのリアクションはないでしょうかと、体をヨロヨロとしながら、だんだんと小さくなっていく。

そして、虫の声のようなコチヨコチヨした声で、

ホラホラ、そんなんじや僕達消えちゃうってば。と、バタバタ暴れている。

私は仕方なく、どうすればいいのかと一人と一匹に聞いてみると、いっぱい喜べ！僕達がココにいる事をいっぱい喜んで！と虫の声。

私は呆れながらも、わーいわーいと、喜んでみると、パパちゃんマンと黄色いウサは、中途半端な大きさまでに体を戻したが、かなり不満らしい。

腕をくの字に曲げて、腰に手をあてながら、そんなテンションだから見る！この姿！と怒っている。

そんな事言われても。

私が困っていると、突然、後ろの方からけたたましい音がした。

振り返ってみると、土埃を上げてこちらにやってくるものが。

先程からしつこく追いかけて来ているお化けだった。

私は、パパちゃんマンと、黄色いウサの後ろに一応回り込んで、そのお化けから身をかばってみた。

パパちゃんマンと、黄色いウサは、あれが悪い奴かつ！と言いながら、それなりのカッコで構えた。

突進してくるお化けに、まずはパパちゃんマンが勢いよく走り寄り、いきなりのキックを食らわした。

しかし、あつと言つ間もなく避けられ、おまけに転がっているところを、上から飛び乗られて、パパちゃんマンはいきなりピンチ。そこに黄色いウサが鋭い耳チヨップ。

お化けは一気に吹き飛ばされ、倒れ込んだ隙に、黄色いウサの回し蹴り。

お化けはあまりの激しい攻撃に、大声で泣き出した。

その姿を見た黄色いウサは、そのお化けのところに行くと、手をさしのべて握手をしながら引き起こし、トボトボと歩くお化けを私のところに連れてきた。

黄色いウサは、息を荒くして、私に向かって謝るよう、言ってきた。

私は訳がわからずに、どうしてかと聞くと、黄色いウサは言った。

このお化け、よく見てくれるとわかるけど、鍋なんだ。

私はまた、首を傾げると、なぜだかお化けは一層激しく泣きじゃくる。

黄色いウサは、強い口調で続け、これが少し前まで私がよく使っていた、オモチャの鍋だと言って、お化けの肩をポンポンと叩く。

私は確かにそれがよく見ると鍋の様にも見える事に気づき、そういえば近頃、鍋で遊んだ記憶がないと思った。

黄色いウサは、コイツ実はリビングのソファの下に入れられて、それ以来そのままにされて埃まみれになって転がっているんだと、悲しそうに言った。

鍋はシクシク泣き、私はだんだんとそれが気の毒になってきた。

そして私はお化けに謝り、起きたらキッチンと片付ける事を約束すると、お化けは泣き止み、元の鍋の姿に戻った。

私は鍋と握手をして仲直りすると、そこにパパちゃんマンが腰を押さえながらやってきた。

パパは私の夢の中だからか、いつものようにしつこいお説教を言い出さずに、私の頭を撫でて、よしよしと満足気に頷く。

私は頼りにならないなーっと、少し皮肉を言うと、パパちゃんマンは、その訳を話した。

なんでパパちゃんマンが鍋お化けに負けてしまったかというところ、それは、娘の私に非があったからだと言い、黄色いウサがこの夢の中で強いのは、今のところの私の一番のお気に入り、オモチャの中ならば尚更、親分中の親分であり、リーダーの中のリーダー、ヒーローの中のヒーローであるからだそう。

それゆへに、私を取り囲むオモチャ事情に詳しく、また、普段の私に対しても知らない事がないほどだと語った。

私はその理由に、妙に納得させられ、夢の中なのに複雑な縦社会だと、なんだか呆れた。

そんな私の姿を見て黄色いウサは、少し夢の中を散歩しようと言って、私の手を引いた。

パパちゃんマンと鍋も続いて、何だか賑やかなものとなった。

私の夢の中は、私が想像していたよりも、かなりの広さで、なかなか色々な物があつた。

珍しそうに辺りをキョロキョロ見ている私に、黄色いウサは、ココにあるもの全てが、私が普段、起きている間に刺激を受けた残像から生まれて、記憶から無くなると、ココから消えていくもの達だと言った。

確かに、よくテレビで見るふざけたお笑いコンビや、今凝っているアニメのキャラクター、雑誌の付録の飛び出す絵本、この前行った遊園地のジェットコースターに、観覧車などが、普段と見ている大きさは異なるサイズで、傾いて地面から覗き出していたり、逆さまに転がっていたりしていた。

そんな中に、今まで自分では記憶にない物があるのに私は気がついた。

地面の上に三つ、人がやつと潜れるくらいの扉が付いた、何かの入り口のようなもの。

しかし、その後ろを覗き見ると、奥行はなく、まるで滑り台の様に頭がトガっていて下は広くなっている、それでいてもう少し緩やか

に丸みを帯びている、おおよそ三角形といえるへんてこな形。

そして右端からピンク、黄色、黄緑と、鮮やかな三色。

私の好みの色だ。

その周りを興味深そうに見ている私に、黄色いウサはエッヘンとばかりに言う。

これは君の夢の入り口だよ。

その日、寝る前に思い浮かんだ楽しい事を、夢の中で叶えられる仕組みなんだけど、やり方は簡単。

君が頭の中で思い描いた事柄が入り口の上に書かれるから、その扉を潜って、そこにある滑り台で下まで滑っていくのさ。

そして下りて行ったその先には、君の望む世界があるというわけ。そしてそれが三つまで用意しておけるから、あれもやりたいこれもやりたいといった時は、次回の夢までその楽しみをとって置ける。

どうだい？画期的だろ？

黄色いウサはそれを自慢気に、そして得意気に私に言ってきたが、それって別に黄色いウサが作ったものなのでは？と思いつながらも、その扉については確かにワクワクしてしまった。

扉の上には、黄色いウサが言った通りに、それぞれに電車やバスのような行き先表示に似たものが掲げてあり、右端から

お花畑で春風との戯れをかわいい動物達と。

ドキドキ遊園地で迫力のアトラクションを王子様と。

珊瑚礁で美しい魚達と流宮城ツアー！。

と、どれも魅力的なものばかりが私の目を奪う。

黄色いウサと、パパちゃんマンと、鍋はどれにするのか決めて、扉を早く開けてごらんと、私を誘う。

とりあえず私は、ピンクの扉の花畑を選び、その扉を開いた。

中は真っ暗で先が見えないほど急なスロープになっている。

私は少し不安になったが、それを横目に、黄色いウサとパパちゃんマンと鍋は、その中に勢いよく入っていった。

私も仕方なく、慌ててそれに続いてそのスロープに飛び込んだ。

まるで狭い狭いトンネルみたいなの穴は、くねくねとどこまでもどこまでも続いていて、私はスピードを増して下へ下へと下りていく。

さすがの私も、悲鳴を挙げて何とか止まらないかと試してみたが、その穴の壁には掴む場所もなければ、引っかかる所さえなかった。そしてそんなふうにもがいていると、いきなり足元が明るくなり、私はスポンというくらいな勢いで放り出されて、オシりを打った。痛たたと、座り込む私を、先に下りてきた三人？が指を指して、同じようにオシりを擦りながら笑っている。

それを見てみると、私も、そのカツコの三人がおかしくて思わず笑ってしまった。

気が付くと、周りは一面見事なお花畑。

しかもその花達が歌を歌っている。

蝶々もそれに合わせてダンスを披露していた。

かわいいリスやおサルさんに、小鹿、白い馬。

彼らは私を囲いながら楽しそうに、花の蜜で宴をしている。

黄色いウサが私にもグラスをくれた。

その中には、金色に輝く芳しい見事なハチミツが入っている。

カンパニー！

パパちゃんマンの合図で皆はグラスにいい音を響かせて、宴は温かな春の爽やかな風に吹かれながら、その幸せな時間を。

なんだか、この子ったら嬉しそうに笑いながら、この頃寝言ばかり言っているけど、どんな夢を見ているのかしら。

きつと、カツコイイ正義の味方の夢さ。

なにそれ？

正義の味方パパちゃんマンっ！

サブッ！風邪ひきそうだね。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363e/>

ラブカクテルス その63

2011年1月26日09時09分発行